

三条 風合戦情報誌

イカマガジン



2025 年号
Take Free

三条 風合戦情報誌 年刊イカマガジン 2025 年号

三条市合併二十周年記念

向かい風に抗う。

三条 凧合戦

SANJO IKAGASSEN

六角巻凧発祥之地・新潟県指定無形民俗文化財

2025 6/7 土曜日 1日目
8 日曜日 2日目

三条防災ステーション(ミズベリング三条)

9:00 ~ 16:00 合戦(1日目) ※雨天中止
9:00 ~ 開会式
10:00 ~ 凧ばやし演奏
11:00 ~ 合併20周年イベント
11:30 ~ 復興支援凧揚げ
13:00 ~ 16:00 合戦(2日目) ※雨天中止

イカ 凧マルシェ
合戦両日同時開催!
飲食、雑貨など 30 出店予定
OPEN 10:00 - CLOSE 15:00

主催:三条凧協会 共催:三条市 協賛:三条観光協会

後援:三条商工会議所 (株)三條新聞社 新潟日報社 BSN 新潟放送 UX 新潟テレビ21 NCT ケンオードットコム 一般社団法人燕三条青年会議所 ※順不同



三条凧協会

きれいな地球で暮らしたい。



株式会社 高儀

ヤマト工業株式会社

TOYAMA GROUP | 外山産業グループ

【三条風合戦】とは

その昔、村上藩の陣屋が三条に設置されたことを記念して、端午の節句に町をあげての風揚げ祭りが行われるようになりました。

初めのうちは、ただの風揚げ祭りでした。陣屋の子供たちの揚げている風に鍛冶屋の子供たちが川の対岸から六角形の風を揚げ、空中で絡めて落としたことが起源となり大人たちも夢中になる風合戦へと変化していきました。

元禄五年から三百数十年続いてきた三条風合戦は、三条発祥の六角巻風を使用し、約三十組の風組が二日間空中で糸を絡め、落とし合い技術を競う合戦です。

揚げ師たちが風を空中で自在に操る妙技は、全国でも他を寄せつけない技術だといわれています。

【イカマガジン】とは

三条風合戦の魅力やそれに関わる様々な人たちのインタビューを通して、伝統がいかに継承されていくのかを綴った情報誌です。

三条風合戦を代表する魅力的な立役者の人となりにより焦点をあて、これから三条風合戦の伝統を継いでいく子供達への未来に向けた手紙として三条風協会企画広報部が企画・制作しています。

イカマガジン 2025年号

02 復興支援と伝統文化 キャンドルジユニ

06 双葉場所を双葉町の文化にしていきたい
双葉町 町長 伊澤史朗

10 名人揚げ師に今聞いておきたい話

上町組 代表 坂井雅弘

12 伝統文化で繋がった前橋市と三条市

前橋商工会議所青年部 緑水会

16 令和7年 三条風協会パートナー企業



復興支援と伝統文化

東日本大震災からの復興、追悼の意を込めて毎月の月命日にキャンドルを灯し続けるキャンドルジュンさん。3月11日に行われる被災地の復興支援と相互交流促進を目的とするイベント「SONG OF THE EARTH 311 FUKUSHIMA」では子供たちの夢を描いた六角巻紙を空に掲げる。『復興支援と伝統文化』という新たな可能性について話を聞いた。

若い頃は伝統行事や地域の祭りなどに関して否定的な気持ちを持っていたというジュンさん。

上下関係や、年長者が偉いという風潮がどうも肌に合わず、田舎の前時代的な考えから離れたかったと言う。

しかし空間演出や野外イベント、フェスなどを手がけるようになり、ネイティブアメリカンなどのセレモニーに対する思想は日本の祭りにも通ずるものがあると気付いた。

「うちの家庭がクリスチャンだったので宗教的なセレモニーは、身近にありました。同時にそういった宗教的なものに対してちよつと疑問を抱いていましたが、次第にネイティブの方たちのあり方って暮らしの知恵の伝承や、コミュニティを強固にしていくという意

識が強いのではないかと考えるようになりました。それは宗教とも言わないようなこの地球、この土地でどう暮らしていくかという知恵の伝承じゃないかなと。それが祭りやセレモニーのよくなものに昇華されていく。そう考えるようになって、日本の祭りに対しても尊敬の念は芽生えていきました」

それぞれの土地に合わせた生き方や知恵の伝承として大きく伝えられるのは天災ではないか。そう感じたジュンさんはキャンドルを灯すことを通じ、被災各地で復興支援や追悼などを行っている。その活動は新潟とも関わりが強い。

2004年、新潟県中越地域を震源とする中越地震が発生。住宅被害は約12万棟、死者60名を超える震災だった。その仮設住宅への慰問を3年間行った。

ジュンさんが3年間訪問する中で感じたのは「これ、終わりはいつなんだろう」という思いだったという。物事には終わりがあるが、仮設住宅がなくなつて終わりかと言ったら、そうではない。自宅に戻ったほうがいいものの新たに復興住宅を建てるとなればかつての地域の人たちとも離れ、仮設住宅でできた繋がりもなくバラバラになつてしまふ。

震災直後はボランティアや支援の方たちで賑わっていた仮設住宅も年々人が少なくなり、支援が引き算されていく現状を目の当たりにした。支援者で賑やかだったことで気持ちのバランスをとっていた地域の人たちがどうにか笑顔を取り戻せるようにと、4年目からは祭りにしてしまおうと考えた。

SONG OF THE EARTHの始まりとなった。

「今、考えるとなんてお祭りにしたのかなんて思う。多分、お祭りって、そういう危機とか悲しみとかピンチの時に伝統文化や暮らしの知恵みたいなものを伝承して、後世に残す祭りもいくつかあるってことをすでに知ってたからなのかもしれないです。元々、フェスを作る仕事をしてるから得意なことでないといけないなと思っていたのも大きいかな」

3年間、仮設住宅を訪問し、命日にはキャンドルナイトを開催してきた。年を追うごとに人が増え、被災当時は行けなかったけど、ずっとモヤモヤした気持ちを持った人がいることもわかっていったという。「被災地支援を！」と呼びかけてもだいたいの人はどうしていいかわからず、今行くべきじゃないだろうと思う人もいる。そのような人たちもキャンドルナイトのような追

悼イベントを長く続けていれば参加してくれるかもしれない。活動の中で知り得た必要な物、事、人のノウハウをこのイベントを続けることで伝えていければいいのではないか。さらに、長く続けることでブラッシュアップし、SONG OF THE EARTHを通じて多くの被災地を救えるのではないかと思ったそう。

SONG OF THE EARTHのメンバーは各々が得意分野で参画し、その新潟メンバーの中には三条風協会の人もいたことで三条風協会と縁がつながった。ジュンさんに三条風協会の印象を聞くと「前から風合戦のことを知ってはいたけど正直、ただ喧嘩?という印象しかなかったね。だから最初は行こうとも思わなかった」と苦笑交じりで答えてくれた。

ただ、ジュンさんの中でずっと気掛かりだった3月11日の追悼の黙祷時間のモヤモヤが風協会に相談するきっかけになった。

阪神淡路大震災や各国の戦争やテロの追悼のキャンドルナイトをする時などは、夜にろうそくを灯し亡くなった方に降りてきてもらいたいそこで対話をする。そして朝日が昇ったらキャンドルを消し空にかえってもらうということを書信条としているそう。東日本大震



災が起こった14時46分という真昼間の黙祷タイミングの時に集まってキヤンドルを灯すというのは何か違うというモヤモヤ。その時に気付いたのは空だったという。

「人は願いごとをする時に空とか太陽とか上を見るんだよね。実際、黙祷した後とかも結構みんな空を見上げてる人が多いし、復興への祈りが空にあるなって感じたんだ。これを考えた時に具体的な復興のテーマを空に上げればいいやつて思った時、いろんなことがバチバチって繋がった感じがした。それが六角風だった」

そこから明らかに黙祷をしていただけの時とは状況が変わったと感じたそう。三条風協会のメンバーが黙祷のタイミングで一斉に六角風を揚げた瞬間のみんなの顔。

中には当時、家族を亡くした方、避難生活が続けてる方もいる。祈っていても悲しみにくれて泣いたり、下向いてた人が自身の言葉でこれから頑張らないかと思っていただけだったとジュンさんは語る。

それが六角風が大空に揚がると歓声が上がって、笑顔になった。誰しもに馴染みのあり昔からある子供遊びの風にあんなにパワーがあるのかとジュンさん自身も驚いたそう。

「あの一斉に揚がる感じとデカさとなんかすごいセレモニーになったなと思う。そう、セレモニーなんだよね。だからそのセレモニーをこれから30年とか40年やっていけば、私たちが死んでも、もしかしたら3月11日の伝統になるかもしれない。」

その時にこの夢を描いた風揚げは元々は三条風合戦がベースにあって、その人たちも水害の被災の経験がある地域なんだっていう縁で繋がっているって傳承されていくと思うんだ。そして今はセレモニーだけど福島の子供達がずっとずっと夢を描いた風を揚げることで伝統になったらしいなって思っているよ」

この繋がりには風協会にも良い変化をもたらした。合戦と言われることから単に風を揚げるだけでなく糸を絡めて落とし合う喧嘩風。怒号が飛び交い、お世辞にも品があるとは言えないそんな激しい祭りだった。しかし被災地での復興の風揚げを通し、風合戦に参加するメンバーも喧嘩だけだったものからそうじゃない可能性を見出していった。誰かを笑顔にできる、感動させることができる。三条で合戦をしている時だけでは感じることでできない充足感や誇りを持っているように見える。

風揚げだけではない。能登半島地震



で被災した地域に植物を寄贈し、自分たちで植樹にも行った保内植木組。塗装業を営むメンバーはペンキを送ったり、飲食業のメンバーは炊き出しなど自分たちのできることで被災地の支援を行った。最初は誘われたから行っていた被災地支援に対し、自発的に自分たちのできることをやろうと取り組むようになり風合戦だけでなく三条風協会の存在が確立されつつある。

新型コロナウイルス禍以降、三条風合戦では元来のルールを大幅に変更をした。人数・風の枚数の制限を行うことで新加入の組での古参の組と同じ土俵で戦うことができるようになった。

その改正後に組を作れたことが三条風協会に入りやすくなったきっかけでもあるという。

ジュンさんに今の三条風協会や三条風合戦への展望を聞いた。

「大きくは2つあって。1つは3月11日の夢の大風揚げっていうのを、もっと多くの人に体感してもらいたいね。描くことで参加もそうだけど、描いた子たちにあの場において欲しい。自分の夢が描かれた風が空に揚がっていて、その風糸を自分で引く。六角風って自分で揚げてみるとさらに凄さがわかるんだよね。そして、もっと3月11日のイベントを風化させないで盛

り上げていきたいよ。

もう1つはスポーツとしての魅せ方を改善したいなって。風合戦に出ていて思うのはスポーツとしてのすごいポテンシャルを持っていると思う。みんな尋常じゃないテクニックを持っているし。年齢も性別も関係なくあそこまでできるスポーツってなかなかないよ。

それをもっと見にきてくれている観客の人たちにわかりやすいような得点やジャッジ制度にするのはどうなのかなって。風合戦はやってみないと凄さは伝わらないかもしれないけど、エンターテインメントとしても優秀なんだからもっとみんなが楽しめるようにして欲しいかな」

福ノ島会、福ノ島組の2つの組の代表を務めるジュンさん。2組も代表するのは大変では？と聞くと「やりすぎたよね。でもみんながやりたいって集まってきたくれたのが嬉しかったんだよね」と笑い飛ばした。

毎年、3月11日に行われる夢の大風揚げでは、これからも子供達の夢や希望が空高く舞うことだろう。

空を見上げ復興の先にある未来に想いを寄せる。伝統文化である三条風合戦と復興支援の取り組みはまだ始まったばかり。



写真の紹介

- ① 帰還困難区域の避難指示解除をキッカケに始まった「ただいまおかえり双葉」でのジュンさん
- ② SONG OF THE EARTH 311 FUKUSHIMA での毎年黙祷後に行われる「夢の大風揚げ」の様子
- ③ 3.11での事業後に誇らしげな三条風協会の面々
- ④ 14時46分黙祷、遠くでサイレンが鳴る
- ⑤ 新調したばかりの名入り風が破けて複雑な表情をみせるジュンさん
- ⑥ 風揚げをしてる子供達の無邪気な笑顔は福島も新潟も変わらない





双葉場所を双葉町の文化にしていきたい

東日本大震災で地震、津波、原子力発電所の事故と幾重にも重なる被害を受けた福島県双葉町。全町避難を余儀なくされ7140人いた町民は全国各地に離散することになる。

震災から11年以上が経ち、2022年8月に町の一部において避難指示が解除された。帰町から新たな町づくりを目指す双葉町町長 伊澤史朗さんに話を聞いた。

取材で双葉町を訪れたのは2024年10月。双葉駅前にある双葉町役場周辺は訪れる度に新たな建物や住宅の建設をしている印象だ。取材当時、双葉町の居住人口は147名。そのうち双葉町のかつての住民は68名、残りの半数以上は移住者だという。

震災から11年5ヶ月かかって避難指示が解除されたが、解除区域は町の15%に留まる。残りの85%の帰還困難区域を2020年代をかけて避難指示解除できるように国との調整を進めているそうだ。

「実際に町の住民に戻ってきている人が68名ですから、7000人以上の人たちは町外ということです。福島県内、福島県外、全国の北海道から沖縄

まで43の都道府県、市区町村では300以上の場所に避難しています。これだけばらけてしまったという自治体はないですよ、他の町では。そう思うと住民帰還は我々が想像していた以上にハードルが高かったが、移住者の方たちは双葉町に新たなチャンスや、活路を見出してきてくれるのでそれはとても嬉しいことです」

移住者の方々の年齢層は幅広く、現役世代から次のライフステージにと双葉町を選んできた方とさまざま。被災地、放射線の影響というネガティブなイメージではなく「ここにしかないチャンス」があるのではないかと伊澤さんは感じている。

伊澤さんは2023年の三条風合戦に赴き、実際に三条風合戦を観戦し、風揚げも経験した。三条市も7・13水害の経験がある自治体ということもありそこで行われている祭りに羨ましさを感じたという。

その日、その瞬間の風合戦に一心不乱になっている姿、飛び交う血気盛んな声に双葉町にはない祭りだと感じたそうだった。

その年の8月、三条風合戦協会は双葉町で開催された「ただいま、おかえり双葉の夏」で初めて三条風合戦双葉場所として合戦を行った。福島県の人にし

たら凧は揚げて楽しむもの。空中で糸を絡めて落とし合うのは初めて見るものだったろう。町長並びに双葉町役場の職員の方々も初めて体験する六角凧の操り方に苦戦しつつも三条の方から伝授されながら一緒に祭りを楽しんでいる姿は復興の大変さを感じさせないくらい熱中しているように見えた。

そして2024年夏、2回目の双葉場所を訪れた際、開会式での伊澤さんの挨拶に三条凧協会の面々が驚いた言葉があった。

『この双葉場所を双葉町の文化にしていきたい』

他地域での凧合戦は幾度となく経験している三条凧協会ではあるが、首長からそのような発言を受けるのは経験がない。

「言葉を選ばずに言わせてもらうと被災地でのイベントというのは売名行為ともとれる話が少なからずあります。ただキャンドルジュンさんに紹介してもらった三条凧合戦はそういうものじゃなくて純粹にこの凧合戦の取り組みを広めようという思いが感じられて、そういった意味でこれが双葉でもずっと継続できればという思いで話をさせていただきました」

震災で犠牲になった方、関連死で亡くなられた方のことはもちろん忘れて

はいけない。だけど今を生きている我々が元気でなければ復興も先に進まない。こんな風に祭りに熱中して、今を楽しむということは今の双葉には必要なことだと思うのですと伊澤さんは付け加えた。

双葉町の新しい復興まちづくり宣言

震災からの復興が急がれる中、地域にあった祭りは後回しにされがちだ。双葉町のように避難指示が出され町から町民がいなくなればなおのことだ。

伊澤さんは帰町に伴い新たな双葉町を作ろうと復興まちづくり宣言をし、元の双葉町とは違う状況にはなっているが町としても伝統や文化、祭りなどは一切変えるつもりはないそうだ。

「全国に避難している双葉町民たちが、1月のダルマ市には結構戻ってきてくれます。そうなると故郷がいいなって思ってもらえるきっかけになります。もちろん10年以上の年月で厳しいものがありますが、今じゃなくてもやっぱり帰ろうって思ってくれる人が一人でも多くいてくれたらなって。祭りにはそういう力があると思っています」

取材当時、復興まちづくり計画の第



三次進行中だったが、伊澤さんは思うような結果が出ていないと顔を曇らせた。

数字的な目標でいえば避難指示解除後から10年以内に町民を2000人と目標を掲げているが、帰町から2年で町民は150人弱。

今の状況では難しいだろうという伊澤さんだが、人と同じことをしてるだけではダメだと語気を強めた。人と同じことをしても同じが、それ以下の結果にしかならない。人が発想しないようなこと、人がやらないこと、他との圧倒的な違いを見出す。

伊澤さんは常々、町役場の職員に「どんな町になったら戻って来たいと思う？何があつたら、どんなサービスがあつたら住みたいって思う？」と問い続けるそうだ。

教育・福祉・就労・住居など課題はたくさんあるもののその中でも伊澤さんがこんな町にしたら自分なら戻って来たいというキーワードは教育だ。

「双葉町は、被災市町村の中で唯一、帰町してからも学校が再開しています。正直、ハード面の校舎とか教室というのは、お金をかければ作ることはできます。そうではなく、どういう教育をするかというベースをちゃんと作りたいと思っています」

伊澤さんのアイデアを聞いていると今後、実現すれば双葉町が教育において全国の先駆けとしての地位を確立できるようなもののばかりで聞いている我々まで心が弾む。

被災地の町長だからこのようなものを考えているのですか？と聞くと「どうなんでしょう。私がこうなったらいいよねっていつも妄想してるだけかもしれない。」とクスツと笑いながら話してくれた。

汚染土を自分ごととし 一緒に考えて欲しい

双葉町が抱える大きな問題として汚染土がある。双葉町と大熊町には原子力発電所の事故により放射線物資で汚染された汚染土壌を入れる中間貯蔵施設がある。

中間貯蔵施設内にある汚染土は全て合わせると1400万リューベ。どのくらいの量なのか検討もつかない。ただその数字が途方もない数字なのわかる。

福島県内での最終処分を2045年までに終わらせることが決まっているそうだが、あと20年で？と浅学ながら思わずにはいられない。

「放射性物質を含む廃棄物を安全に処理するための基準が80000ベクレルと定められていて、中間貯蔵施設にあるものは全てその基準をクリアしているものなので、危険なものではないのです。でも放射線で汚染された土とか認識されない。道路の補修材としてアスファルトの下に敷いたらほとんどが遮蔽されて線量検査しても問題ない数値です。これをもらったら貧乏くじを引くみたいな感覚じゃなくて日本全体として問題意識を持つてほしい」

地震、津波、原子力発電所事故という何重苦とも言える辛さを味わった福島県だけでなんとかするというのはおかしい話ではないか。そもそも放射線の数値を言われて「ゼロじゃないからだめだ！」とアレルギー反応を示す人も多いが、自然界にも放射線は存在しているのだから本来ゼロではない。宇宙から、大地から、空気中にも放射線は存在するのだ。

放射線は目に見えない。目に見えないものへの恐怖心は計り知れないが、それを払拭するには放射線に対する正しい知識と現状を知ろうという姿勢が大事なのではないか。

「中間貯蔵施設の現状を見てほしい。我々の取り組みを理解し、汚染土を押し付け合つたのではなく自分ごととして





一緒に考えて欲しい」と伊澤さん。

そしてこの問題は新潟県に住む我々も人ごとではない。柏崎刈羽原子力発電所を有する新潟県も大規模な地震に見舞われている。2007年の中越沖地震では最大震度7を記録し、原子炉は全ての運転停止しているが、これが稼働していたらと思うと肝が冷える。

2024年の能登半島沖地震でも使用済み核燃料プールからの漏水はなかったが、いつまた災害が起こるかはわからない。自分ごととして汚染土の問題を考えた時、新潟県に住む我々にもできることがあるのではないかと考えずにいられない。

伊澤さんの双葉町を住みたい町にするにはの話でもあった教育。学問だけでなく人としての教えが汚染土の問題ともリンクする気がした。人が苦しんでいたら手を差し伸べ、お互いの理解を深めて助け合う。そういったお互い様の精神はとも日本人らしい思想ではないかと感じた。誰かがハズレくじを引かされたようなことを思うのではなく、困っているならお互い様と各地から声が上がするような日本へ。

マニュアルもない、正解もない前代未聞の被災地域の町長。震災発生当初は問題が山積みで辞めようかなと挫折そうになったと言いますが「正解もな

い中で大変だったけど、町にこんなに人が戻ってきたねって笑い話にできるようにねばいいけど」と柔らかく微笑む顔がとても印象的だった。

双葉町との交流の中で、我々ができることは風揚げに留まらず災害に対する意識改革や復興支援をできるところから共に歩いていくことではないかと感じた。

写真の紹介

- ① イカマガジンの取材に快く応える双葉町 町長 伊澤史朗さん
- ② 町役場町長室には双葉ダルマの描かれた三条六角巻風50枚サイズが常設で飾られていたことに驚きと喜びが溢れてきた
- ③ 昨年8月の「ただいまおかえり双葉の夏」で「この風合戦双葉場所を町の伝統行事にしていきたい」をお言葉をいただき、涙がでた
- ④ 3組対3組で行う風合戦は大いに盛り上がった
- ⑤ 夏の暑い中合戦で汗を流した協会メンバーと町民の皆さま
- ⑥ 1月に開催される「双葉ダルマ市」には、風協会のメンバーも毎年お邪魔している
- ⑦ 楽しそうに風糸を引く伊澤町長



名人揚げ師に

今聞いておきたい話

上町組 坂井 雅弘

現存する風組の中でもっとも長く存続する上町組で代表を勤める坂井雅弘さん。平成13年に最高技術賞に贈られる白法被を当時、最年少で獲得。名人の証とも言われる白法被をもらうほどの腕前の揚げ師である坂井さんの風との付き合いは幼少期から始まる。

上町組のように現在の本町が起源の風組にとって三条風合戦は三条祭りとは並ぶ町内の二大祭り。坂井さんが幼いころは3日間、毎日午後から行われていたという。小学校は半日で学校が終わわり、鞆を家に投げすぐに風合戦へ行く準備をしたそうだ。

「親が風をやっていたわけではありませんでしたが、当時は町内には子供もたくさんいましたから、みんなで連なって行っていましたよ。風合戦が終わるとボロボロになった風を持って町内を一周行進するんです。その時、子供には鉢巻をくれるんだけど、行進が終わるとお菓子ももらえたんです。それが小さい頃は一番の楽しみでしたよ」

少しずつ成長するにつれ、合戦場の土手まで行く大八車に風を積んだり、



水を汲みに行かされたりと大人の手伝いをし、高校を卒業するまで続けていた。当時の三条商業高校裏河川敷で行われる合戦は、土手の桟敷から揚げ師の屋号や名前を呼ぶファンがいたそう。そんな掛け声に惚れ込み、いつか自分もこんなふうにな名前を呼んでもらいたいながら揚げてみたなと思っていて、当時を振り返った。

大人になっても若手のうちは、練習以外では風系には全く触らせてもらえなかった。合戦場で風系に触れたのはいつ頃ですか？と聞くと45歳くらいとの答えに驚愕した。

若手はまず、合戦場で落ちた風を拾いに行くところからだった。それが数年。終わると籠を持つ稽古をし、籠持ちをまた数年。今度はカラ持ち。あつという間に10年以上。そこから予備場で予備風を揚げられるようになり合戦場まで持っていくが、合戦はさせてもらえなかった。

「合戦場まで持っていくんですけど先輩たちに糸はすぐに渡さないといけなかったです。たくさんいたんですよ、先輩たちが。だた、ある時から合戦をさせてもらえるようになったんです。たまたま私が予備場から合戦場に持っていく途中で相手の風が絡まってしまつて、合戦開始になってしまったんで

す。突然、そんなふうになってしまったものだから先輩たちも風系を取ることができなくて、合戦なんてやったことないから無我夢中で揚げたのを覚えています」

そんなことがあり、今度はお前も合戦場に入つて揚げてほしいぞとお墨付きをもらえ揚げ師仲間入りを果たした。それでも上町組のように人数の多かった組ではメインの揚げ師は同じ組の中であつても競い合つていたと当時を振り返った。

平成12年の風合戦初日、上町組は風につけるワニを巧みに使い順調に点数を伸ばしていた。ところがそのワニに不備が見つかり、なんと初日の点数を全て没収されてしまった。翌日の合戦までに補修を行い、合戦で使用する風系もワニも全て協会に提出しなければいけなかったという。翌朝、合戦前にチェックを受けたもので合戦を行つたが初日の点数はもちろん無し。二日目の点数だけが最終結果となった。順調に行けば優勝に手がかったという点数だっただけに悔しかったと坂井さんは語る。

「翌年はそんな苦い経験をしたから絶対に優勝しようと組の士気も高かったですね。外山さんという組の先輩から『坂井、お前悔しいだろ？今年、お前

がメインで揚げてみる。それで総合優勝取れたら最高技能賞ももらってやるからとにかく頑張れ』って言ってくれたんです」

風糸もワニも不備がないように今年のはしっかり仕上げた。昨年のように絶対しないと心に誓い、合戦に臨んだ坂井さんは総合優勝を勝ち取り、最高技能賞も受賞した。当時、49歳での最高技能賞は史上最年少。坂井さんと同じような年齢の人たちはまだ合戦もさせてもらえないような人がたくさんいた中で快挙だった。

現在の坂井さんは風協会の事業に積極的に参加している。県内外問わず、多くの事業に参加し、三条では春と秋の2回しか合戦がないから、いろんなところで風揚げに参加するのはとても有意義だと話す。夏の福島県双葉町、冬の群馬県前橋市での合戦にも参加して、地域を問わず風合戦という場を提供することで、地元の人が風に触れる機会をつくる。

「双葉町は風合戦の文化もなかったところだから、その楽しさを子供達に伝えていけるかが肝になるだろうね。町長さんの力も、キャンドルジュンさんの力も借りながら。ああいう新しい町で移住者の人たちが新しい文化を根付かせて、こういうお祭りができたんだ

って知ってもらえれば最初から参加しやすい。お祭りって途中から参加するのってハードル高いでしょ？」

前橋もそうだね。合戦場もいい場所だし、風が吹く河川敷だし、空つ風を利用するなんて上州らしさも出てもつつと大きなイベントだと思ふよ。

運営は大変でしょうけど、1日だけなのは勿体無いし、風合戦って面白いんだっていうのが伝わって組が増えてくれば三条より規模は大きいものになると思うね」

風協会の若手は逆に言えば社会の第一線で活躍する世代。なかなか会社を休んで行けないだろうから、まだ体が動くうちは私がお手伝いができるんじゃないかなと意欲を見せる坂井さんの行動力には驚かされるばかりだ。

三条風合戦の展望を聞くと、坂井さんが熱心に参加している小学生への風揚げ授業について語ってくれた。

「やっぱり地元の子供たちに風合戦というものを知ってもらう、体験してもらうことで裾野を広げないといけないと思っています。やっぱり風合戦って男の人がやるイメージが強いかもしれませんが、小学校なんか行くと子供達はそんなの関係ないんですよ。今は小町組しか女性の組はありませんけど、各組には女性も参加している組もあり



写真の紹介

- ① 自身の人生と重ねて、三条風合戦の歩みを語ってくれる上町組代表の坂井雅弘さん
- ② 当時最年少49歳で最高技能賞、いわゆる白法被を獲得し三条風合戦を代表する揚げ師になる
- ③ 県外での協会事業にも積極的に参加し、教える側、伝える側としての役割も大きい
- ④ 市内小学校への風揚げ授業にも毎回参加してくれ子供達からは「五郎さん」と親しまれている

ます。せっかく六角巻風なんですから技術があれば男女関係ないんですよ。子供が楽しそうにやっていたら親だって興味持って風揚げしたくなるかもしれないじゃないですか。そこまで引き込めたらいいなって実は、思っているんです」

坂井さんが幼い頃、当たり前のように風合戦の合戦場に行っていたように現代の子供達も6月になったら大人の勇ましい合戦を見て、9月の秋季大会では自分たちが主役になれるSMO KOGASSENKIに参加するのが当たり前になって行く日が待ち遠しい。



伝統文化で繋がった

前橋市と三条市

群馬県前橋市で33回続く上州空っ風凧揚げ大会。毎年2月に開催され、赤城山から吹き下ろす「赤城おろし」と呼ばれる強風を利用した、約20畳の大凧揚げが目玉のイベントだ。

上州空っ風凧揚げ大会では2年前から新潟県三条市の六角凧を揚げる「上州けんか凧」も実施。なぜ三条の六角凧を前橋市で行うことになったのか、上州空っ風凧揚げ大会を主催する前橋商工会議所青年部 緑水会の3名に話を聞いた。

冬に市民も楽しめるイベントを企画して欲しいと30年以上前に緑水会が行政から依頼を受け、始まったといわれる上州空っ風凧揚げ大会。赤城凧の会の方々に協力を仰ぎ、大凧揚げで市民を楽しませていた。

第30回大会ではキッチンカーを呼ぶことでさらに賑わいを添え、第31回大会では六角凧による合戦形式の凧揚げを初めて取り入れた。凧を用いた合戦は前橋にはなかった文化だ。その企画を練ったのは令和5年度に緑水会事業委員会委員長を勤めた石川将平さん。

「委員長になった当初からこの凧揚げ

大会の運営には熱量を持っていましたね。というのも、私が担当していた委員会の他の事業は前年の踏襲が多かったので自分が勝負するなら凧しかないって思っていました。私に委員長を任せてくれた当時の初谷代表幹事に恩返ししたいというのが大きなモチベーションでした」（石川さん）

委員会立ち上げ当初は凧揚げ以外の選択肢でも前年との差別化ができるかと考えていたが、地域の特性である空っ風を利用して点や、イベントの成熟度を考えた時、凧で勝負するのが最善の手法だったという。メインの大凧揚げに加えて今後、発展していくようなイベントを入れることはできないかと考えた石川さん。何かこのイベントでの突破口を見つけようと前橋以外の地域で凧に関することを調べ、新潟県の白根大凧合戦に行き着いた。前橋から白根まで赴き、凧の勉強がてら現地で色々見たが地形的にも、文化的にもこれは前橋では出来ないと断念。

白根からの帰りに、三条の須藤風屋に寄る予定を組んでいた石川さん。凧揚げ大会で何か凧のグッズを売ろうと思っていたので風屋を検索し、一件だけ見つけたのが須藤風屋だった。ヒントがあれば良いなとの思いで来たことが三条凧合戦との出会いに繋がった。

「三条に來たのは2023年の8月くらいだったと思います。三条風合戦のことは全く知らなくて、風屋さんにいけば何か協力してもらえることがあるかなという気持ちで行ったんです。そうしたら、須藤さんから三条風協会の副会長が三条商工会議所青年部の当時の会長の結城さんだったというのを聞いて、すぐ電話しました」（石川さん）

2023年9月、三条風合戦秋季大会に緑水会の4名で視察を兼ねて三条を訪れ、三条風合戦を初めて観戦。前橋での風揚げと違い空中に何枚も風が揚がり、それを落とし合う風合戦。石川さんは実際に合戦に参加し、前橋でもやりたいという思いと、これと同じものが出来るのかという難しさを感じた。

その時、石川さんと一緒に参加した河島優樹さんは当時のことをこう語ってくれた。

「石川委員長の委員会で副委員長をさせてもらっていたので一緒に三条に行ったのですが、風合戦を見て純粋にすごいなって思いました。観客の数もですが、参加している人の熱量がすごかったです。私も石川と同じでこれをどうやったら前橋でもできるのかって思いはありましたけど、実際に初めて合戦を試してみたらすごく楽しかった。こ

れは前橋でも絶対にやりたいって気持ちが強くなりました」（河島さん）

2月に向け緑水会では六角風を10枚発注し、練習を開始。新しく風の組を作るにあたって、初回から10枚風を注文するのはなかなかの異例だ。緑水会の本気がここで伺えた三条風協会からも感嘆の声が上がった。

風協会の面々は前橋に練習や風のセッティングなどの指導に何度か赴き、当日までの協力を惜しまなかった。そして前橋で行う風合戦を「上州けんか風」と命名し、満を辞して当日を迎えることが出来た。

2024年2月、上州空つ風風揚げ



大会当日は快晴の暖かい日だった。ただ風揚げに肝心な風がとて弱い。大会の1週間以上前から石川さん、河島さんは風がないことを危惧し、毎日天気図と睨めっこをしていたと苦笑いを浮かべた。当日は三条風協会からは50名ほど、緑水会は70名ほどの参加があり合計4組で合戦を行った。石川さんは初めて前橋で行った合戦を振り返る。

「風がないのはわかってはいたのですが、正直どうなるのかとヒヤヒヤしていました。緑水会のメンバーではあの風では合戦はおろか、揚げることもすら難しかったと思います。

そんな中でも三条の方々の風を揚げて合戦までもっていく技術力に感動しましたし、本当に感謝するばかりでした」（石川さん）

2025年2月に行われた第33回上州空つ風風揚げ大会では海外映画とのタイアップ企画や、昨年と違い空つ風がよく吹いたことで一般の方にも六角風を体験してもらえる時間もあり、さらに盛り上がりを見せた。

2年目の上州けんか風を終え、今後の課題はこれをどう継続していくか。3年目の上州けんか風のバトンを渡されたのは緑水会次年度委員長の藤田順也さん。石川さんが前橋で風合戦がや



りたいと声を上げた時に河島さんと同じく副委員長を任されていた。そんな背中を見てきた藤田さんだが、河島さんとは違い、9月に三条の風合戦の視察には行けなかったため、翌年三条風合戦を見た時に驚いた。空中に何枚も揚がっている風、参加者の熱気、風糸が切れた時風が落ちる時の衝撃に圧倒されたそうだ。

「9月に三条の大会を見ないまま、2月の前橋での大会を迎えたので石川さんや河島さんと比べたら熱量はちよつと違った形だったと思います。特にイベント当日は裏方をしていたこともあ

り、けんか風にも積極的に関われなかったのですが、三条での本場の風合戦を体感できて一気に熱量が上がりました。これは体験しないとわからないですし、参加してこそ面白みがわかります」(藤田さん)

風揚げは見ているより、参加する方が楽しい。これは緑水会のメンバーが実際に体感していることだろう。大人でも子供でも実際にやったら魅了される楽しさや難しさがあるのが風合戦なのだ。これは前橋でも三条でも変わらない。

そこにはどう一般市民を巻き込み、どう参加してもらうのか。藤田さんは前橋の子供達にもっと上州けんか風という新しい文化を知ってもらうために小学校や子供達の集まるところで体験会をやりたいと思いを話してくれた。

上州けんか風に参加してくれていた緑水会の面々を見ていて感じるのは三条と気質が近く、お祭り好きな気質なのではと感じとれる部分が多く見受けられた。河島さんが三条のようにお祭りとして一日中、風合戦にだけ熱中して終わったらみんなで酒を酌み交わしたいと、昔から三条で風を揚げていた人のように話していたのがとても印象的だった。上州けんか風が単なるイベントではなくお祭りという伝統文化

になっていくためにはこの気質は重要な点ともいえそうだ。

風合戦という伝統文化で繋がった三条と前橋。土地柄も人口規模も全く違う地域だが、その違いや魅力について石川さんはこう語る。

「三条の人が明らかに前橋の人と違うのは、三条市民ということに誇りをもっている。燕三条はものづくりの町ですって語れるようなものが前橋にはないんです。今の我々のような世代では県庁所在地だっていう自負もあまりないです。昔の人なら前橋市は、県庁所在地なんだって言うってきたと思いますけどね」(石川さん)

この話をされた時に初めて石川さんにお会いした時、前橋の産業ってなんですか?と聞いたことを思い出した。

前橋のメインの産業はかつては生糸産業だったが、今はなんでもあるが特筆するものがないと言われた。

だが我々、三条市民からしたら前橋の魅力はたくさん感じていた。前橋の中心市街地は行政主導のまちづくりではなく官民連携で町に賑わいを創出する動きがとても盛んだ。前橋市アーバンデザインというまちづくり構想は第2回先進的まちづくり大賞において最高賞の国土交通大臣賞を受賞するほどだ。前橋市民、企業、行政がそれぞれ





自分ごととして地域の課題を捉え、連携して課題解決へと向かう姿勢は燕三条にはまだ足りていない視点ではないか。

石川さんもこれは当たり前のことだと思っていたから三条の人たちと接しなければ特別なこととは思わなかったそうだ。

風合戦を通じ、自分たちの地域の魅力を再確認できたことは地域交流という最大の利点と言えるだろう。

今年も予定では春の三条風合戦、夏の双葉場所、秋の風合戦秋季大会、冬の上州けんか風という年に4回も各地で風合戦が開催される。

日本海側で雪の降る新潟県において冬の風合戦は特に貴重だ。

まだ始まったばかりの前橋の上州けんか風という文化だが、良いところも悪いところも含め少しずつ成長していく過程を見て欲しいと藤田さん。今後の上州けんか風についての思いを聞いた。

「自分が担当委員長の年度には一般の方たちをもっと巻き込んで、前橋の文化として楽しんでもらえらたと考えています。今は三条風協会の人たちに手伝ってもらおうという形で来てもらっています。いずれ上州けんか風に三条の風組として出場したいって言われる

くらいになったら嬉しいな。まだまだ時間はかかりそうですけど」(藤田さん)

前橋の人口規模を考えたら上州けんか風は三条風合戦より規模の大きな風合戦に育つ可能性は大いにあり得る。緑水会だけでなく前橋の人たちで新しい風組を作り、子供も大人も楽しめる前橋の新たな伝統文化として根付くことを切望する。

写真の紹介

- ① 今回の取材に応えてくれた前橋商工会議所青年部 緑水会の3人、看板風には上毛三山の1つ赤城山が描かれている
- ② 三条風合戦に初めて参加した緑水会のメンバー、この日までに多くの練習を重ねてきた
- ③ 上州からつ風風揚げ大会で初めて上州けんか風を開催した当時の緑水会代表幹事 初谷桂吾さん
- ④ 初めての上州けんか風には三条から50人、緑水会から70人が参加し、大いに盛り上がった
- ⑤ ここまで前橋市と三条市の関係構築に尽力をしてくれた藤田順也さん(左)、石川将平さん(中)、河島優樹さん(右)

 川口商事株式会社



SANJO ECHIGO JAPAN
六角巻 須藤 越後三條
新潟県伝統工芸品認定品
須藤 風屋
六代目 須藤 謙一
〒955-0081 新潟県三条市東裏館2丁目2-16
TEL: 090-3223-3243
HP: <https://sudoikaya.jp>
SUDO IKAYA SINCE 1847
●お客様のご要望にお答えします。ご相談ください。

石黒内科医院

三条市西裏館1丁目10-46

TFL: 0256-32-4970

インターネット・ケーブルテレビ・電話

NCT



0120-080-009

www.nct9.co.jp



NCTコネクト配信中!!

私たちのステージは世界。
卓越した先進の技術でお応えします。

SANJO

株式会社 **三條機械製作所**

〒959-1151 新潟県三条市猪子場新田1300番地

Tel 0256-45-3131(代) Fax 0256-45-5017

www.sanjokikai.co.jp



お客さまの
笑顔のために

さんしん 三條信用金庫
<http://www.shinkin.co.jp/sanshin/>



無形から有形の総合製造のバイオニア



株式会社 **ヤマト工業**

〒955-0832

新潟県 三条市 唐江町4丁目17-19

TEL 0256-35-8288 FAX 0256-35-8290

HP: <http://yamato-ind.co.jp/>



 **moisteane**

株式会社モイスティヌ燕三条販売

物品協賛





超抗菌銅繊維フィルターマスク
 × 銅繊維を編み込んだ次世代マスク

燕三条の最新技術

抗菌 防臭 防炎 防湿 防汚 防虫 防菌 防ウイルス

ホームページ QRコード

NRストア QRコード

株式会社 ナガオカ・リコー
 〒955-0081 新潟県三条市東長谷 2丁目17番15号
 TEL.0256-34-5121 FAX.0256-35-6020



川口工器株式会社

祝 令和7年度 三条鳳合戦

作業用工具・理美容具製造メーカー
株式会社 マルト長谷川五佐所
MARUTO HASEGAWA KOSAKUJO INC.

〒955-0831 新潟県三条市土場 16番1号
 Tel. 0256-33-3010 / Fax. 0256-34-7720
<https://www.keiba-tool.com>

KAKUMI



野崎貴実税理士事務所



ツルタボルト 株式会社



中山鉄工所

中山 隆

〒955-0033 新潟県三条市西大崎 1丁目28番12号
 TEL (0256) 38-6284
 FAX (0256) 38-6412

祝 三条鳳合戦

新潟の地を通信で結ぶ

藤島無線工業株

本社(長岡)・新潟営業所・三条支店
<https://www.fmkc.co.jp>



Hiigata Seiki



私たちは三条鳳合戦を応援しています





株式会社 高儀

きれいな地球で暮らしたい。

TOYAMA
GROUP ●

| 外山産業グループ



シマト工業株式会社